

日本学術会議社会学委員会「社会理論分科会」第24期・第3回会合  
(2018年10月21日 於学習院大学東2号館8階第二会議室 14:00-16:00)

議事要旨

出席者

今田高俊 江頭大蔵 遠藤薫 盛山和夫 佐藤嘉倫 友枝敏雄 真鍋一史 三隅一人  
村松潤一 山田真茂留

欠席者

園田茂人 町村敬志 矢澤修次郎 吉原直樹 渡辺秀樹

議題と決定事項

前回の議事要旨を確認したうえで以下の議事に入った。

(1) 社会理論分科会の課題について

配布資料に基づき盛山委員から標記のタイトルで問題提起がなされた。学術をめぐる一般的動向、人文学・社会科学の現状、社会学の現状と課題、社会理論分科会の課題が取り上げられたが、とくに分科会は「実際に社会理論の探求を行う」場ではない、ということが強調された。また現実的なテーマを選び、それとの関連で社会理論的な探求の意義を導き出すような営みが大切なのではないか、という議論がなされ、その後各種の意見交換となった。これをテーマとしてシンポジウムを開催するかどうか、などについては今後検討することとした。

(2) 社会理論と社会学理論について

配布資料に基づき友枝委員から標記のタイトルで報告がなされた。Allan (2006, 2012)、Sanderson (2006) による「社会理論と社会学理論の違い」についての論文が紹介されたのち、厚東洋輔論文(未刊行)に依拠しながら、社会的なものと社会的なものとの違い、とりわけ19世紀末から20世紀後半までのイギリスにおける「社会的なものと社会的なもの」の紹介がなされた。さらにアメリカ・ドイツ・フランスにおけるそれらの捉えられ方のラフスケッチが試みられ、社会理論と社会学理論についての捉え方は、各国における社会学誕生の文脈の違いによって異なるという報告がなされた。この報告をふまえて、意見交換がなされた。

(3) シンポジウム等の今期の活動方針について

今期、提言、報告、シンポジウムのうちのどれをどのように実現していくか、今後さらに検討していくこととした。

(4) その他

次回委員会の候補は1月13日(日)あるいは1月14日(月・祝)。次回は村松委員が報告することとした。[その後メール審議を経て1月13日(日)に確定。]